

研究ノート

『学生生活実態調査 2017』からみる歴史学部生 —〈大学の学び〉を中心に—

齊 藤 利 彦

〔抄 録〕

大学が実施する学生生活実態調査は、当該大学の学生像を把握していくためにも重要な調査である。佛教大学では、昭和54年度（1979年度）に「学生生活白書」というかたちで、はじめて学生生活に関する調査が実施され、同57年度（1982年度）から「学生生活実態調査」と名称を変更して調査を行い、平成2年度（1990年度）から、隔年で調査している。では、本学歴史学部生は大学生活において、充実度をいかに感じ、どのような志向、興味、不安や悩みなどのかかえているのであろうか。

本稿は、筆者が学部学生支援担当主任という立場であることから、試みに、『佛教大学学生生活実態調査 2017』から、〈大学の学び〉を中心に、歴史学部生に該当するデータについて振り返りを試みたものである。

キーワード 『学生生活実態調査 2017』 歴史学部生 大学での学び 充実度 非充実度

はじめに

大学が実施する学生生活実態調査は、学生の意識や嗜好、消費傾向、教育内容や方法への期待・要望、大学生活上の不安や悩み、進路就職への意識や選択希望など、学生の生活実態を把握すること、時代の変化に応じた比較分析を行なうことによって、学内における学生支援の施策や態勢を整備する際の基礎的資料を得ることなどを目的としている。したがって、大学における学生支援関連調査のなかでも中心的、重要な調査である。

同調査の嚆矢は、戦後の新制大学に限定して言及すると、昭和25年（1950）、東京大学が行なった学生生活実態調査と考えられている⁽¹⁾。この調査は、昭和27年（1952）と昭和43年（1968）を除き、現在にいたるまで、毎年1回実施されている。

昭和28年（1953）には京都大学が学生生活に関する調査を行ない、その後、各国公立大学で実施され、1960年代には、私立大学の多くでも行われるようになった。現在、ほとんどの大学・短大で毎年か隔年、あるいは数年に1回のかたちで行われ、報告書が冊子体やデジタル媒体で

刊行されている。

また、日本学生支援機構や日本私立大学連盟、全国大学生活共同組合連合会などは、加盟する大学へ依頼する、あるいは委嘱されるかたちで学生生活や学生の消費傾向などの実態調査を行っている。これらの調査数値は、全国的平均値の基礎的資料として参考にされ、また同時に、調査結果が社会的に話題となることもある⁽²⁾。

ところで、佛教大学では、昭和54年度（1979年度）に「学生生活白書」というかたちで、はじめて学生生活に関する調査が実施された。翌年度（1980年度）は、新入学生の意識・生活実態調査を行い、『新入学生の意識・生活実態調査報告書』を刊行した。同56年度（1981年度）は全学調査に戻して調査がなされ、『学生生活白書』としてまとめられている。同57年度（1982年度）から「学生生活実態調査」と名称を変更して調査を行い、『学生生活実態調査報告書』を刊行した。平成元年度（1989年度）は、学部学科増設・調査方法や質問項目検討のため、調査は実施せず、翌年度（1990年度）から、隔年で調べることに決し、いまに至っている⁽³⁾。

近年の同調査の主旨と構成は「大学で学ぶ学生の姿や資質も刻々と変容」することから、入学した「多様な学生」が「正課や課外における学修や体験を通じて、一人ひとり成長を実感し、社会に踏み出すために必要な力をしっかりと身に付けてもらう」ために、大学が「学生の実態を正確に把握しなければなら」ない、というもので⁽⁴⁾、設問は、「進学理由・充実度・期待度」や「生活」「経済」「正課教育」「課外活動」「進路・就職」「不安・悩み」「大学への意見・要望」の全八章から構成されている。第一章から第七章は設問項目に対する選択回答形式の定量調査、第八章「大学への意見・要望」は“フリーアンサー”（以下、「自由記述欄」と略）とし、学生の“生の声”を聞く定性調査をとっている。

2017年度は実施年にあたり、同年10月10日から31日（10月10日告知開始・同月31日回答締切）の期間をもって、2017年度学生生活実態調査を実施した。同年10月時点の佛教大学在籍生（学部・大学院）全員を対象に、学生ポータルサイト「B-net」で告知を行い、インターネット調査のかたちでアンケートを行った。在籍生6711名（2017年10月1日現在）のうち、3815名（在籍学生56.8%）から回答を得ている。

設問は全部で45問、3815名を母集団として集計し、これらについて、単純集計といくつかの項目によるクロス集計を行い、その分析結果は、今回の調査を含む3回分（2013年・2015年・2017年）の時系列比較のもと、『学生生活実態調査 2017』（2018年2月刊行）としてまとめられた⁽⁵⁾。

ところで、本学の歴史学部生は大学生活において、充実度をいかに感じ、どのような志向や興味、不安や悩みなどをかかえているのであろうか。学部の教員ならば、学生支援上、ゼミの運営上、授業展開上、強い関心をもつものであろうし、これらの点を十分に把握しなければ、学部教育や学生支援の充実をはかることはできないだろう。

そこで、筆者は学部の学生支援担当主任という立場であることから、試みに、『佛教大学学生

生活実態調査 2017』の歴史学部生に該当するデータについて振り返りを行ってみたい。とはいえ、質問項目は広範囲、かつ多岐にわたり、筆者自身、専門的力量や技術が乏しいので、〈大学での学び〉をキーワードにして、同報告書第四章「正課教育」を中心に、学びへの意識、期待・要望などを整理してみたい。

なお、2017年度の学生生活実態調査に回答した歴史学部生は、歴史学科は347名・歴史文化学科222名であることを確認しておく。

I 歴史学部生と「大学の勉学」

1 本学に「入学してよかったこと」と学び

「佛教大学に入学してよかったことは、どういうところですか」は、3つまでの複数回答選択可能な設問で、回答項目は【表1】にあるように、9項目用意されている。まず、全学動向を確認したうえで、歴史学部の上位3位を考察してみたい。

本学全体の回答選択率上位はつぎのとおりである。

第1位「資格や教員免許が取得できること」	54.0%
第2位「友人ができたこと」	48.0%
第3位「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」	43.4%

全学的に、学生の資格・免許志向の強さを再確認できる数値がでているが、友人ができたことが第2位の割合をだしているのは喜ばしい、と考える。また、第3位に「自分の好きな（興

表1 「佛教大学に入学してよかったことは、どういうところですか」

	●凡例	知識や技術が身につけられる	自分の好きな（興味のある）勉強ができること	資格や教員免許が取得できること	友人ができたこと	趣味や課外活動（クラブ・サークル・ボランティア等）を楽しむこと	他人と協力して何かを達成できること（行事・イベント運営・ボランティア等）	図書館など施設が充実していること	その他	特になし
全体 時系列	全体 【2013】 n=2062	31.6	53.0	54.0	46.8	32.0	5.4	14.6	5.3	5.3
	全体 【2015】 n=2288	30.1	45.4	56.3	43.8	32.8	5.1	14.4	4.6	5.9
	全体 【2017】 n=3815	30.9	43.4	54.0	48.0	32.3	5.0	12.8	3.9	5.2
学科 時系列	歴史 【2013】 n=277	36.8	69.0	52.7	44.0	34.7	3.2	19.1	3.6	2.9
	歴史 【2015】 n=213	31.9	61.5	52.1	40.4	32.4	2.3	16.9	4.2	5.2
	歴史 【2017】 n=347	30.5	56.2	51.0	38.6	30.8	1.7	18.4	4.3	4.9
学科 時系列	歴文 【2013】 n=162	30.2	82.1	37.0	48.8	28.4	4.9	21.6	5.6	2.5
	歴文 【2015】 n=143	30.1	68.5	40.6	39.9	36.4	1.4	17.5	5.6	6.3
	歴文 【2017】 n=222	27.9	74.3	39.2	40.1	33.8	2.7	20.7	4.5	3.6

味のある）勉強ができること」があるのが本学学生の向学心のあらわれ、といえよう。

経年で比較してみると、「資格や教員免許が取得できること」は2015年度に約2ポイント上昇したが、2017年度には2013年度水準にもどってる。「友人ができたこと」は、前回よりも4.2ポイントと増加している。「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」も約2ポイント下落しているものの大きな差はでていない。

では、歴史学部生が「入学してよかった」と考えている項目上位はどのような点であるのか、【表1】を用いながら確認していきたい。

歴史学科の上位三位はつぎのかたちとなった。

第1位「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」	56.2%（全学43.4%）
第2位「資格や教員免許が取得できること」	51.0%（同54.0%）
第3位「友人ができたこと」	38.6%（同48.0%）

一方、歴史文化学科は下記の結果となっている。

第1位「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」	74.3%（全学43.4%）
第2位「友人ができたこと」	40.1%（同54.0%）
第3位「資格や教員免許が取得できること」	39.2%（同48.0%）

両学科とも第1位が「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」で、全学スコアよりも高く、とりわけ、歴史文化学科は約74%を数える。学科ごとの第2位・第3位は順位が入れ替わっているが、回答項目は共通しており、歴史学部生が入学してよかったと考えている事柄は共通している。しかも、全学の項目とも同じであるのが特色である。

経年変化をみると、歴史学科は回答選択項目のほぼすべてにおいて経年で減少しており、その幅が広いのが、実は第1位の「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」であった。

2013年度は69.0%を数えたが2015年度には61.5%と、7.5ポイントも下げ、2017年度は前回よりも5.3ポイントも下がる結果となった。つまり、各調査では最上位の選択項目であるが、その関心は経年で大幅に減少しているのである。

第2位の「資格や教員免許が取得できること」は51.0%、前回は52.1%、前々回52.7%であるので、微減傾向ではあるもののほぼ同水準を保っている。しかし、全学より低い値でもある。第3位の「友人ができたこと」は38.6%と、上位2項目よりも比較的低いスコアで、全学と比べても約10ポイントも低いのは気になるところといえよう。しかも、経年では2015年度は前回よりも3.6ポイント下げたが、2017年度はさらに1.8ポイント下落し、40%台を切ってしまった。

歴史文化学科の第1位「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」は約74%も数え、14学科中、断トツの1位である。後述する教育内容に期待する質問において、「多彩なカリキュラムによる科目選択」が44.6%と、質問回答選択項目トップの数値であることと無関係ではなからう。

2013年度は82.1%と非常に高い数値を数えたが、2015年度に68.5%まで下落する。2015年度在籍生の気質をうかがい知ることができよう。2017年度は5.8ポイント上昇し70%台まで戻した。

第二位「友人ができたこと」は40.1%、2015年度より0.2ポイントと微増し40%台に戻している。ただ、2013年度は48.8%であったので、下げ幅は大きいといえる。第3位は「資格や教員免許が取得できること」で39.2%と、全学の値より8ポイント、歴史学科とは11.8ポイントも低い。

「資格や教員免許が取得できること」に関しては、学科間で意識の違いがでていているといえるが、学科順位をみると、14学科中、歴史学科第8位・歴史文化学科第12位と、全学規模でいうと、割合は低い。

2 歴史学部生の大学生活における興味・関心

大学生が大学生活を送るにあたり、どのような点に興味・関心があるのだろうか。学生の志向や嗜好・消費傾向をうかがう点でも重要な質問項目である。以下、これまで同様、全学的傾向をみたうえで、両学科を読み解いていきたい。

設問「興味や関心を持っていること、行っていることは何ですか？」は、ここ3回、調査されているが、学科別の数値は2013年度調査ではしめされていない。したがって、学科の経年は2015年度・2017年度で考えていきたいが、多種多様な回答項目が立項されており、ひとつひとつ検証することは困難であるので、本稿の主旨にもとづき、「大学の学び」を軸に検討してみたい（【表2】）。

表2 「興味や関心を持っていること、行っていることは何ですか？」

	●凡例	大学の勉強	資格や教員免許の取得	進路・進学	クラブ・サークル活動	ボランティア活動	留学	アルバイト	学外での個人活動	旅行	美容・ファッション	車・オートバイ	音楽・美術・芸術	パソコン・インターネット	読書	友人との関係	その他
全体 時系列	全体 【2013】 n=2062	29.6	45.4	30.2	28.1	13.3	6.9	24.7	4.5	15.9	8.1	4.9	16.2	11.1	14.5	15.9	4.7
	全体 【2015】 n=2288	32.2	51.2	31.0	30.9	13.2	7.3	23.3	3.9	14.3	8.5	3.8	12.0	8.3	10.0	16.8	3.8
	全体 【2017】 n=3815	30.2	42.3	25.1	32.2	9.3	6.0	29.1	4.3	15.2	12.0	5.2	12.5	7.1	9.1	17.6	4.5
学科 時系列	歴史 【2013】 n=277	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	歴史 【2015】 n=213	44.6	59.2	36.2	33.3	7.0	3.3	19.2	2.8	14.1	5.2	4.7	10.8	7.5	11.3	13.6	1.9
	歴史 【2017】 n=347	36.3	48.7	26.2	30.3	5.5	2.3	24.2	5.2	17.0	8.6	6.3	13.3	9.5	11.0	13.0	6.6
学科 時系列	歴史文 【2013】 n=162	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-	-
	歴史文 【2015】 n=143	46.9	39.2	36.4	41.3	3.5	2.1	16.8	2.1	12.6	7.7	4.9	13.3	14.7	14.7	11.2	4.9
	歴史文 【2017】 n=222	39.6	32.4	24.8	36.9	3.2	2.7	27.5	7.2	17.1	11.3	2.7	17.6	11.7	17.6	15.8	4.1

まず、全学の選択回答項目上位3位を整理してみよう。

全学

第1位「資格や教員免許の取得」	42.3%
第2位「クラブ・サークル活動」	32.2%
第3位「大学の勉強」	30.2%

これらの選択された回答項目が全学的な学生の興味関心事の核といえるが、この傾向も、歴史学部にも該当する結果が出ている。

歴史学科上位3位は以下のとおりである。

第1位「資格や教員免許の取得」	48.7%
第2位「大学の勉強」	36.3%
第3位「クラブ・サークル活動」	30.3%

歴史文化学科については、つぎのようになった。

第1位「大学の勉強」	39.6%
第2位「クラブ・サークル活動」	36.9%
第3位「資格や教員免許の取得」	32.4%

この質問項目でも、全学の上位3位と順位が異なるものの、選択されている回答項目は同一であり、学科内順位で変動はあるが、同一項目が上位3位を占めており、「資格や教員免許の取得」「大学の勉強」「クラブ・サークル活動」が、歴史学部生の大学生活興味における興味・関心の中心といえる。

とくに、歴史文化学科は前節でみた「入学してよかった」の第1位から第3位がそのままスライドしたかのような上位となっている。とくに、「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」と「大学の勉強」がともに第1位であることから、〈大学での学び〉に関しての興味・関心の高さをうかがうことができよう。

学科ごとの経年変化を確認すると、歴史学科第1位「資格や教員免許が取得できること」は、2015年度は59.2%であるので、今回は10.5ポイントも下落している。第2位「大学の勉強」も前回44.6%であったので、8.3ポイント減少、第3位「クラブ・サークル活動」は前回比マイナス3.0ポイントと、上位3位は減少傾向をみせている。そのかわり、個人の嗜好や消費に関わり項目が微増する傾向にあり、大学生活に対する興味・関心が多様化しはじめているといえる。

歴史文化学科第1位「大学の勉強」も前回46.9%であったので、7.3ポイント下げている。第

2位「クラブ・サークル活動」は前回比マイナス4.4ポイント、第3位「資格や教員免許の取得」は前回比マイナス6.8ポイントと、同学科も歴史学科同様、上位3位が減少し、「アルバイト」や「学外での個人活動」、「旅行」などの項目が上昇しているのが目立つ（【表2】参照）。

このように、歴史学部生は、本学に入学して自分の興味ある勉強ができることを評価し、また、大学の勉強や資格・免許取得に興味・関心が高いことが浮かび上がってきた。一方で、「学業」への不安や悩みも抱えていることが実態調査からうかがい知ることができる。この点に関して、次節で振り返ってみたい。

3 学業への不安

歴史学部の学生が大学生活のなかで、こういった不安や悩みを抱えているのか。全学の傾向を確認したうえで、学科ごとに上位3位を記してみたい（【表3】）。

全学

- 第1位「進路・進学」 50.4%
- 第2位「学業」 47.9%
- 第3位「経済的問題」 21.0%

歴史学科

- 第1位「進路・進学」 53.9%
- 第2位は「学業」 47.8%
- 第3位「経済的問題」 20.7%

表3 「今、不安や悩みがあるとすれば、それは何ですか？」

	●凡例	学業	課外活動	友人等との対人関係	健康	性格	進路 (就職・進学等)	経済的問題	異性問題	家族・家庭	その他	不安や 悩みは ない
全体 時系列	全体 【2013】 n=2062	45.9	10.0	18.4	11.4	16.0	61.0	27.5	8.4	6.0	5.2	8.0
	全体 【2015】 n=2288	46.3	9.0	20.6	10.8	14.9	55.9	20.9	8.4	5.0	5.0	8.8
	全体 【2017】 n=3815	47.9	8.7	17.8	11.0	13.9	50.4	21.0	9.6	5.2	4.2	9.6
学科 時系列	歴史 【2013】 n=277	46.9	10.5	19.1	8.3	14.1	70.8	30.7	10.8	4.0	3.6	6.5
	歴史 【2015】 n=213	50.7	9.4	23.9	10.8	12.2	56.8	20.7	12.2	4.2	6.1	8.5
	歴史 【2017】 n=347	47.8	6.3	17.0	11.0	9.2	53.9	20.7	8.6	5.2	4.0	10.7
学科 時系列	歴文 【2013】 n=162	40.7	8.6	14.2	18.5	21.6	63.0	26.5	6.2	6.2	5.6	8.0
	歴文 【2015】 n=143	41.3	11.9	23.8	17.5	18.9	55.9	18.9	5.6	4.2	2.1	9.8
	歴文 【2017】 n=222	47.3	10.4	18.9	11.3	18.0	63.6	18.5	8.6	6.8	3.6	7.2

歴史文化学科

第1位「進路・進学」	63.6%
第2位「学業」	47.3%
第3位が「友人等との対人関係」	18.9%

全学で不安に思う項目第1位は「進路・進学」、続いて2.1ポイント差で「学業」、第3位は大幅に下がった数値で「経済的問題」となっている。

歴史学科は上位3位が全学と同じ項目で、第1位は全学より3.5ポイント高いが、第2位「学業」は全学よりもわずか0.1ポイント低い割合となっている。第3位も全学と僅差の割合で、歴史学科は全学と上位3位、割合などもほぼ同様という結果となっている。

歴史文化学科をみると、上位2位は全学・歴史学科と同じだが、第1位「進路・就職」が60%を占めており、歴史学科と比較して約10ポイントも高い数値である。報告書第六章「進路・就職」の各質問項目と照合して、具体的には、どういった不安や悩みなのか、詳細に検討する必要がある⁽⁶⁾。

しかし、第2位の「学業」は歴史学科と0.5ポイント差と、ほぼ同値であるため、第1位の占める割合の高さが目立つかたちとなっている。第3位は「友人等との対人関係」だが、実は歴史学科第4位「友人等との対人関係」17.0%、歴史文化学科第4位が「経済的問題」18.5%であるので、両学科で第3位と第4位が入れ替わっていて、近似するスコアをしめしている。しかも、歴史文化学科第3位と第4位は0.4ポイント差であるので、ほぼ同一ととらえることも可能な数値である。

したがって、歴史学部生の不安や悩みの核は「進路・進学」「学業」「友人等との対人関係」「経済的問題」、といった4点と理解してよいのではないか。

本稿では、〈大学の学び〉が眼目であるので、両学科2位の「学業」を中心に考えてみたい。両学科ともに、入学してよかったこと、大学生活上の興味・関心において、〈大学での学び〉に関する項目の割合が高いことは、すでに述べたとおりである。そのうえで、大学生活上、不安や悩みに思う第2位が「学業」であることは見逃せないであろう。

歴史学科第2位「学業」は、経年では2015年度に3.8ポイント上昇したが、2017年度調査では3.1ポイント下がり、2013年度を1.9ポイント上回る水準となった。歴史文化学科は経年増加の傾向にあり、前々回比プラス7.4ポイント、前回比6.0ポイントと上昇しており、同学科ともに、「学業」に対する不安や悩みが増加していることがわかる。

「自分の好きな（興味のある）勉強ができること」と「大学の勉強」（興味・関心）、「学業」（不安や悩み）を、数値的呼応でみると、

歴史学科	56.2%	⇔	36.3%	⇔	47.8%
歴史文化学科	74.3%	⇔	39.6%	⇔	47.3%

といった結果となる。

前節でみてきたように、自分の興味のある勉強ができ入学してよかったと思い、かつ大学の勉強に強い関心や意識をもつだけに、不安や悩みも大きくなる傾向にあるのではと考える。

学業への不安や悩みがどのようなものであるのかは、実態調査の質問からはこれ以上は検討しかねるが、歴史学部生が正課教育に対して、どのような思いをもっているのか、という点は知り得るので、次章で考えてみたい。

Ⅱ 歴史学部生と正課教育への意識

1 授業への希望と教員へ求める点

設問「授業について希望することは何ですか」は、学生から教員へ、こういった授業運営や工夫を求めるか、という問いで、3つまでの複数回答が可能となっている。質問自体は、FDとも関連する重要な質問項目である。

【表4】のように、歴史・歴史文化学科で、この項目も第1位・第2位が共通した結果がでている。以下に整理してみたい。

歴史学科

第1位「レジュメを配布してほしい」	38.9%
第2位「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」	36.0%
第3位「学生の理解度を把握しながら授業を進めてほしい」	24.2%。

表4 「授業について希望することは何ですか」

	●凡例	板書やプレゼンテーションを工夫してほしい	資料や参考書等を提示してほしい	シラバスの内容に合致する授業をしてほしい	レジュメを配布してほしい	ビデオ等の視聴覚教材を活用してほしい	演習やフィールドワークの時間を増やしてほしい	地域や学外の社会人(講師)による授業を増やしてほしい	学生の理解度を把握しながら授業を進めてほしい	熱意のある授業をしてほしい	私語にはきちんと注意してほしい	休講をなくしてほしい	その他
全体 時系列	全体 [2013] n=2062	39.8	12.9	12.0	34.0	13.9	10.2	6.8	26.5	23.8	22.9	2.9	4.3
	全体 [2015] n=2288	37.7	13.8	12.2	37.9	14.4	10.4	5.6	24.5	22.2	17.2	3.0	3.9
	全体 [2017] n=3815	35.3	12.3	8.9	38.9	16.5	13.0	6.8	28.0	19.9	15.3	1.5	7.9
学科 時系列	歴史 [2013] n=277	38.6	13.0	13.7	44.0	11.2	11.6	5.4	20.6	19.9	31.4	3.6	4.7
	歴史 [2015] n=213	37.6	13.6	15.0	40.8	5.2	11.7	3.3	21.6	16.4	21.1	4.7	7.0
	歴史 [2017] n=347	36.0	10.4	11.5	38.9	10.1	15.3	3.2	24.2	16.1	23.3	2.0	11.8
学科 時系列	歴文 [2013] n=162	42.0	9.9	14.8	34.0	12.3	18.5	4.9	21.6	22.2	32.1	1.9	3.7
	歴文 [2015] n=143	37.8	16.1	16.8	37.1	12.6	17.5	5.6	21.0	19.6	25.2	2.1	2.1
	歴文 [2017] n=222	33.3	11.7	14.9	40.5	17.1	27.9	9.5	19.4	17.6	27.5	0.9	5.9

歴史文化学科

第1位「レジュメを配布してほしい」	40.5%
第2位「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」	33.3%
第3位「演習やフィールドワークの時間を増やしてほしい」	27.9%

両学科上位2位は僅差のスコアだが、【表4】のように、経年的にみると、第1位の「レジュメを配布してほしい」は、歴史学科は2013年度44.0%、2015年度は3.2ポイント下がり、2017年度は1.9ポイント下落といったように減少傾向、逆に歴史文化学科は2013年34.0%であったが、2015年度は前回比3.1ポイント増、2017年度も前回比3.4ポイント増と、経年的に、増加傾向をしめしている。

第2位「板書やプレゼンテーションを工夫してほしい」は、【表4】をみてもわかるように、両学科で減少している。

第3位は二学科で異なる回答となった。歴史学科は「学生の理解度を把握しながら授業を進めてほしい」24.2%。これも経年的に増加しているが、2013年度から2015年度はプラス1.0ポイントであったのが、2017年度は前回比プラス2.6ポイントをしめしている。歴史文化学科は「演習やフィールドワークの時間を増やしてほしい」27.9%。2015年度に1.0ポイント下げたが、2017年度には10.4ポイントも増加するという現象をみせている。学生気質の変化のあらわれといえようか。

このように、歴史学部生の授業への希望上位は経年的に減少しているとはいえ、学生はレジュメ配布と板書・プレゼンテーションの工夫を要望している、といってよい。レジュメ配布の希望増加は全国的な傾向であり、たとえば、『私大連 2018』においても、前々回28.5%、前回30.3%・今回34.2%と、経年で増加している。

近年、授業展開のなかで、パワーポイントにみられるプレゼンテーションソフトによるスライド画面が増えており、その画面をもとに作成されたレジュメが配布されることが多い。場合によっては配布されないケースもあるだろう。これと関連して、板書をノートに書き写すかたちの講義形式が少なくなる傾向がある。そのため、試験前など、あとから授業内容を振り返る、あるいは復習する際、容易に授業内容を振り返ることのできる、よりいえば、授業内容が詳細に記された資料を手元においておきたい、という考えから、数値が増加している、と推察する⁽⁷⁾。

このような傾向は、授業中、教員の授業内容を理解しながらノートをとる、といったことが苦手な学生が多くなっていることとも関係しているだろう。レジュメ配布の希望や板書、プレゼンテーションの工夫についての要望は、学生がノートのとりかたやまとめかた、テスト準備などの不安を内包する結果のあらわれといえるのではないか。先述した「学業」に対する不安・悩みの一端といえないだろうか。

とすれば、初年次教育や教員へのFD活動がますます重要となるであろう。実は初年次教育へ

の要望などをしめす結果も別の設問回答結果にでている。つぎに、それらをふりかえてみたい。

2 教育内容などへの期待と要望

設問「佛教大学の教育内容や方法に対する期待や要望は何ですか？」(【表5】)も、3つまでの複数回答可能な質問項目である。全学を確認してから、両学科の傾向を確認してみたい。

全学

第1位「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」	30.0%
第2位「大学での学習に適応できるよう導入教育を充実させてほしい」	27.2%
第3位「教養科目の充実を図ってほしい」	22.3%

以上のように、全学では「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」が第1位だが、【表5】のように経年的に減少しており、2017年度は前回比マイナス8.7ポイントである。それでは両学科をみてみよう。

歴史学科

第1位「大学での学習に適応できるよう導入教育を充実させてほしい」	28.2%
第2位「教養科目の充実を図ってほしい」	27.7%
「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」	27.7%
「授業時間数や必要単位数を減らしてほしい」	27.7%
第3位「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」	21.3%

表5 「佛教大学の教育内容や方法に対する期待や要望は何ですか？」

	●凡例	大学での学習に適応できるよう導入教育を充実させてほしい	一貫した専門教育が受けられるようなカリキュラムにしてほしい	教養科目の充実を図ってほしい	多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい	授業時間数や必要単位数を減らしてほしい	少人数を授業で増やしてほしい	学外での活動も単位としてほしい	カリキュラム開発に学生も参加してほしい	他大学との単位の互換の制度を充実させてほしい	授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい	その他
全体 時系列	全体 [2013] n=2062	21.3	23.2	29.1	39.4	14.7	22.1	8.8	3.2	6.5	20.7	9.5
	全体 [2015] n=2288	26.5	23.4	29.7	38.7	15.8	19.8	9.5	3.3	7.3	20.6	9.1
	全体 [2017] n=3815	27.2	19.1	22.3	30.0	21.9	15.5	12.4	3.3	7.4	18.3	10.1
学科 時系列	歴史 [2013] n=277	26.0	24.9	38.3	43.0	10.5	23.1	4.7	2.9	7.2	26.4	5.4
	歴史 [2015] n=213	27.7	22.1	31.9	36.2	16.9	21.1	7.5	2.3	7.0	24.9	7.5
	歴史 [2017] n=347	28.2	18.4	27.7	27.7	27.7	18.7	7.5	3.5	6.3	21.3	9.5
学科 時系列	歴史 [2013] n=162	21.0	22.2	26.5	46.9	12.3	24.1	11.7	3.1	9.3	22.8	12.3
	歴史 [2015] n=143	26.6	25.9	32.2	43.4	18.2	14.0	7.7	0.7	8.4	20.3	7.7
	歴史 [2017] n=222	29.7	21.2	21.6	44.6	18.0	14.0	11.7	3.2	8.6	23.9	7.2

歴史文化学科

- | | |
|----------------------------------|-------|
| 第1位「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」 | 44.6% |
| 第2位「大学での学習に適応できるよう導入教育を充実させてほしい」 | 29.7% |
| 第3位「授業計画がはっきりわかるシラバスを作成してほしい」 | 23.9% |

歴史学科は第1位と第2位のスコアは0.5ポイント差であるので、ほとんど変わらない関心事といってよい。しかも、第2位は3項目が同スコアであるので、歴史学科は教育内容への期待・要望が具体的かつ多種にわたっている、といえる。「教養科目の充実を図ってほしい」と「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」は、お互いに呼応する項目といえよう。気になるのは、「授業時間数や必要単位数を減らしてほしい」27.7%で、カリキュラムや必要（必修）単位の意義などへの理解が希薄である可能性をしめすものであり、ガイダンスなどでの工夫が必要なのかもしれない。

歴史文化学科は「多様な科目選択ができるカリキュラムにしてほしい」が44.6%と断トツの第1位で、14学科中トップである。表をみてもわかるように、経年的には微増・微減の傾向であるが、ここ3回の調査では45%前後で推移している上位項目である。

この項目と関連するだろう「教養科目を充実させてほしい」は21.6%と、他の項目の割合と比較しても、必ずしも高くはない。また、相対する項目「一貫した専門教育が受けられるようなカリキュラムにしてほしい」は21.2%と、2倍近い差がでており、多彩な科目選択ができるカリキュラムへの要望の強さをうかがうことができる。

また、両学科ともに、「大学での学習に適応できるよう導入教育を充実させてほしい」が上位にある。これは学生の初年次教育の充実を求める声といえ、先述した「学業」への不安と呼応しているのではないか。

Ⅲ 大学生生活で身につけたい力と実感の弱さ

1 歴史学部生が考える大学生生活で身につけたい力

日本私立大学連盟がおこなった第15回学生生活実態調査の結果分析から、私立大学生においては、学生が実利的志向を重視する傾向が読み解かれている⁽⁸⁾。歴史学部生が大学において、どのような力を身につけたいと考えているのか、その力が身についた、あるいは身につけているという実感はどの程度なのであろうか。〈大学での学び〉と関連するので確認してみたい。

「大学生生活で身につけたい力は何ですか?」「これまで大学生生活で身についたと実感できる力は何ですか?」、これらの項目は報告書第4章「正課教育」内の質問ではなく、第6章「進路・就職」内で立項されているものである。確かに、身につけたい力は正課教育のみでつくはずではないが、正課教育と大きく関連するものとして振りかえることとする。

まず、全学的傾向を確認してみたい (【表6】)。この質問も回答は3つまで可能である。

全学

- 第1位「視野を広げ、物事を幅広く考える力」 49.6%
- 第2位「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」 41.9%
- 第3位「専門知識をもとに論理的に考える力」 31.4%

第1位の「視野を広げ、物事を幅広く考える力」は前回48.5%、前々回51.4%と、1.9ポイント下げたあと、2017年度に1.1ポイントと微増している。ただし、それぞれ調査年において最上位であることから、本学学生が学生生活のなかで、もっとも身につけたい力であるといえる。

第2位は「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」で前回39.0%・前々回42.6%といった変化しており、2015年度に3.6ポイント下落したが、2017年度は逆に2.9ポイントあげ、ほぼ2013年度の水準に戻った。第3位は「専門知識をもとに論理的に考える力」は前回33.3%・前々回33.0%であるので微増のち、微減に転じているものの、大きな変動とはいえないだろう。

このようなスコアから、佛教大学の学生は幅広く視野を広げ、論理的な思考力と自身の考えをわかりやすく説明できる力を身につけたい、という志向が強いと思われる。では、歴史学部生はどういった傾向なのであろうか。

表6 「大学生活で身につけたい力は何ですか?」・「これまで大学生活で身についたと実感できる力は何ですか?」

	●凡例	外国語でコミュニケーションする力	パソコンやインターネットを使いこなす力	視野を広げ、物事を幅広く考える力	専門知識をもとに論理的に考える力	自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力	相手の状況や考えを考慮して話をしたり、対応する力	計画を立て、目標に向かって行動する力	リーダーシップをとる力	集団や組織的行動の強調する力	その他
全体 時系列	全体 [2013] n=2062	20.4	25.7	51.4	33.0	42.6	34.1	17.0	8.4	17.1	4.3
	全体 [2015] n=2288	22.6	28.4	48.5	33.3	39.0	32.3	17.7	8.6	17.4	4.0
	全体 [2017] n=3815	23.1	28.1	49.6	31.4	41.9	27.4	17.4	9.9	14.9	4.1
学科 時系列	歴史 [2013] n=277	22.0	31.0	52.0	39.4	45.5	27.8	16.2	9.4	15.2	3.6
	歴史 [2015] n=213	23.9	35.2	52.1	42.3	40.4	27.7	14.6	5.6	13.1	2.8
	歴史 [2017] n=347	15.6	36.3	43.8	36.0	48.1	24.2	19.3	8.9	15.6	4.3
学科 時系列	歴史文 [2013] n=162	9.3	22.2	53.7	40.7	47.5	34.0	17.9	7.4	17.9	3.7
	歴史文 [2015] n=143	13.3	30.8	49.7	44.8	44.1	28.0	20.3	4.9	16.8	2.8
	歴史文 [2017] n=222	17.1	34.7	57.2	33.8	51.4	23.0	22.1	3.2	12.2	5.9

歴史学科において身につけたい力の上位3位はつぎのとおりである。

第1位「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」	48.1%
第2位「視野を広げ、物事を幅広く考える力」	43.8%
第3位「パソコンやインターネットを使いこなす力」	36.3%

歴史文化学科は下記の結果となった。

第1位「視野を広げ、物事を幅広く考える力」	57.2%
第2位「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」	51.4%
第3位「パソコンやインターネットを使いこなす力」	34.7%

両学科とも順位は異なるものの、共通する項目がそれぞれ上位となっており、とくに、歴史文化学科は上位2位が50%台をしめている。

経年変化をみると、歴史学科第1位「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」は、2015年度は5.1ポイント減少したのが、2017年度は7.7ポイントも上昇し、ここ3回の調査で最も高い数値をだしている。第2位の「視野を広げ、物事を幅広く考える力」は減少傾向にあり、前々回・前回は0.1ポイント差とほとんど同スコアであったのが、2017年度に8.3ポイントも下落した。第3位「パソコンやインターネットを使いこなす力」は経年的に増加しているが、前回調査からは微増といえる。

歴史文化学科の上位3位の経年変化は、第1位「視野を広げ、物事を幅広く考える力」は2017年度57.2%と高水準だが、前回は49.7%と50%台をわずかに切っていた。今回、7.5ポイントの上昇である。第3位は歴史学科と同様、「パソコンやインターネットを使いこなす力」で、同学科も経年的に増加している。2013年度は22.2%であったのが、今回の調査では34.7%と、12.5ポイントも増加しており、実利的能力の向上を志向する傾向が浮かび上がっているといえよう。

前章で歴史学部生の興味・関心を、大学の勉強を中心に振り返ったが、興味・関心の回答には「パソコン・インターネット」もあり、歴史学科9.5%、歴史文化学科11.7%であり、興味関心の数値は低いといえる。いまみたような身につけたい力は、あくまでも学業や進路で役立たせたい、使いこなしたい力であって、興味・関心とは異なるといえよう。

このようにみると、歴史学部生は、幅広く視野を広げ、かつ論理的な思考力を求め、自分の考えを的確につたえたい、という論理的能力を希求する傾向が強い、と考えられる。

2 大学生活で身につけたい力の〈実感〉の乏しさ

【表7】は歴史学部生が大学生活で身につけたい力の実感度、ともいうべきものをまとめたものである。これをみると、学生が身につけたい力があまり身につけていないと感じている結果がでている。

歴史学部の身につけたい力の核である4項目の相関を、【表7】にもとづきながら整理してみたい。

表7 「大学生活で身につけたい力は何ですか？」

	●凡例	外国語でコミュニケーションする力	パソコンやインターネットを使いこなす力	視野を広げ、物事を幅広く考える力	専門知識をもとに論理的に考える力	自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力	相手の状況や考えを考慮して話したり、対応する力	計画を立て、目標に向かって行動する力	リーダーシップをとる力	集団や組織的行動で強調する力	その他
全体 時系列	全体 [2013] n=2062	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	全体 [2015] n=2288	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	全体 [2017] n=3815	8.5	23.0	29.3	20.2	16.9	23.4	17.1	7.4	23.8	15.1
学科 時系列	歴史 [2013] n=277	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	歴史 [2015] n=213	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	歴史 [2017] n=347	5.8	22.5	26.5	21.6	19.3	19.3	17.3	8.1	26.8	17.6
学科 時系列	歴史 [2013] n=162	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	歴史 [2015] n=143	—	—	—	—	—	—	—	—	—	—
	歴史 [2017] n=222	5.4	24.3	27.5	23.4	13.1	25.2	21.2	5.0	24.3	16.7

・「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」

（身につけたい力割合⇔身についたと実感できる）

歴史学科 48.1%⇔19.3%

歴史文化学科 51.4%⇔13.1%

・「視野を広げ、物事を幅広く考える力」

（身につけたい力割合⇔身についたと実感できる力）

歴史学科 43.8%⇔26.5%

歴史文化学科 57.2%⇔27.5%

・「パソコンやインターネットを使いこなす力」

（身につけたい力割合⇔身についたと実感できる力）

歴史学科 36.3%⇔22.5%

歴史文化学科 34.7%⇔24.3%

・「専門知識をもとに論理的に考える力」

（身につけたい力割合⇔身についたと実感できる力）

歴史学科 36.0%⇔21.6%

歴史文化学科 33.8%⇔23.4%

以上のように、身につけたい力と、力が身についたという実感が大きく乖離しているといっ
てよいだろう。最大差は歴史文化学科「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」で、
38.3ポイント差をしめす。

両学科における実感度の値差は約2～3ポイントであることから、各項目において共通して
実感が乏しい。「自分の考えをまとめてわかりやすく表現する力」は歴史文化学科のほうが6.2
ポイント低く、逆に、「計画を立て、目標に向かって行動する力」は4.1ポイント高い。

【表7】をみてもわかるように、実感のほうが高いスコアをしめしているのが「集団行動や組
織的行動での強調する力」と「その他」である。前者は歴史学科で11.2ポイント、歴史文化学
科は12.1ポイント高く、実感度が強いといえる。

おわりに

以上、〈大学での学び〉を中心に、歴史学部がよせる期待や要望、不安や悩み、つけたい力と
実感などを、『学生生活実態調査 2017』をとおして考察してみた。一部の項目検討となったが、
歴史学部生の学生像の一端はしめすことができたのではなかろうか。

『学生生活実態調査 2017』をとおして浮かび上がった歴史学部生の〈大学での学び〉に対す
る意識・関心は、つぎのとおりといえようか。

- ・両学科とも、大学での学びに関して高い興味・関心をもつが、経年的には減少傾向にある。
- ・学びへの不安が高く、歴史文化学科は調査ごとに増加をしめしている。
- ・自分の好きな、あるいは関心のある勉強ができることを評価しているが、経年的に減少し
ている。
- ・資格や教員免許取得の意識・関心・興味は学科内では高いものの経年減少の傾向にあり、
全学のなかでは、必ずしも関心が高いとはいえない。
- ・正課教育に対する期待や要望は、歴史学科は比較的多岐にわたるが、歴史文化学科は多彩
なカリキュラムを履修をしたいという考えが中心である。
- ・学業への不安と関連する意味で、初年次、あるいは初年次導入教育の充実を求める傾向を
もつ。
- ・両学科とも、授業運営上、教員に対し、レジュメの配布や板書の工夫を求めている。

・全学的傾向と同様だが、大学で身につけたい力と身についたという実感とが大きく乖離している。

歴史学部生は〈大学での学び〉に高い関心と意識をもっているが、一貫した専門的カリキュラムにおける専門教育よりも多彩な科目を履修したい、という意識傾向のほうが強く、それは歴史文化学科により強くあらわれている、といえる。

さらに、大学で身につけたい力と身についたという実感とが大きく乖離していることは、大生活への充実度を考えるうえで、大きな影響を与えているのではないかと考えるが、最後に、歴史学部生の大学生活充実度をしめし、終わりにかえたい。

『実態調査 2017』では、選択回答項目「充実している」「ある程度充実している」合算値を〈充実感を抱いている割合〉と定義し、これを〈充実度〉とし、経年比較をおこなっている。この定義を、『私大連 2018』にあてはめると、「充実している」30.8%・「まあ充実している」41.6%、合算72.4ポイントという結果で、全国規模では、私立大学生は70ポイント台をキープしている。

佛教大学生の充実度は、2013年度68.4ポイント、2015年度67.6ポイント、2017年度67.2ポイントと微減傾向をしめしている。2017年度結果のスコアは全国平均を5.2ポイントも下回るうえ、60ポイント台にとどまっていることは、学内で共有すべき点ではないだろうか。

また、『私大連 2018』の結果と比較してもわかるように、回答項目「充実している」がおおよそ24パーセント台であり、全国スコアより低い。このことが本学学生の〈充実度〉が60ポイント台にとどまる原因といえよう。しかも「ある程度充実している」も経年微減傾向であることも注意しなければならない。すなわち、充実度のコア層はこの項目層であるため、ここが減少すると、充実度は下落するといえるからである。

今回の調査では「普通」と回答している学生は前々回22.9%・前回24.2%・今回24.8%と、わずかながら増加に転じている。「あまり充実していない」の割合が年々減少している結果が反映したと考えられる。「充実していない」が今回3.0%。前回2.8%・前々回2.2%と、経年で微増していることも要注意であろう。

学年別充実度は、1年生69.1ポイント・2年生65.7ポイント・3年生65.8ポイント・4年生68.5ポイント・5年生以上45ポイントと、大きな差はでないものの、学年別にみても、充実度の割合は7割を切っている。とくに、2年生・3年生の充実度が低い。1年生から2年生に年次があがって充実度がさがっているのは大学生活の慣れや、入学不本意学生の場合、専門教育の開始とともに生じる失望感からであろうか。ここに2年生問題の一端が垣間見られるものといえる。

つぎに、歴史学部における学生の充実度について確認したい。歴史学科の充実度は64.6ポイント、歴史文化学科が67.5ポイントである。歴史学科の充実度が全学スコアよりも低いのが目

立つ。詳細にみると、歴史学科は「充実している」が22.8%、「ある程度充実している」41.8%、歴史文化学科は「充実している」25.2%「ある程度充実している」42.3%で、両回答項目ともに、歴史文化学科が若干、高めのスコアをしめしている。

経年変化をみると、歴史学科の〈充実度〉は2013年度73.3ポイントと高スコアであったのが、2015年度68.0ポイントと前回比5.7ポイントもさがり、2017年度もマイナス3.4ポイントと、経年で減少しつづけている。

「充実している」は2013年度26.0%、2015年度に21.1%と下落し、2017年度は若干持ち直している。2015年度の落ち込みはマイナス4.9ポイントをしめすが、一期生が卒業した二期生以降の在籍生の意識傾向があらわれているといえよう。

「ある程度充実している」も減少傾向であるが、2013年度から2015年度に0.8ポイント減でとどまったのが、2017年度に5.1ポイントと大きく値を下げた。しかも、「充実していない」の値が5.5%で、14学科中第2位の高スコアであり、2013年度と比較すると、約5倍となっている。歴史学科の充実度が64.6ポイントと低いのは「ある程度充実している」の減少、「充実していない」の増加が理由のひとつと考えられる。2017年度在籍の歴史学部生が大学生活に充実を大きく感じていないことを浮き彫りにしているといえる。この点、「卒業時アンケート」などの結果とも照合すべきところだが、今後の課題としたい。

ついで、歴史文化学科の充実度をさぐってみたい。同学科は2013年度69.1ポイント、2015年度70.7ポイントであった。今回、67.5ポイントであるが、前々回と前回がほぼ同スコアといえ、2017年度は3.2ポイントさがってしまった。

原因のひとつは「充実している」が前回比マイナス2.1ポイント、「ある程度充実している」1.1ポイント減、合計3.2ポイント下落したことによる。

「ある程度充実している」も経年減少をしめすが、ここ2回の調査では1.1ポイント減とどまっており、「普通」が前回よりも6.7ポイント増加、「あまり充実していない」が4.7ポイント減少、「充実していない」も1.1ポイント増でおさまったのが、充実度の大幅な下落をとどめている、といえる。下げ幅は歴史学科よりは低いが、歴史文化学科も同様の傾向にあることはうかがえる。

「充実している」の値は、両学科ともにスコアが上下動する傾向にある。一方、「ある程度充実している」は両学科とも経年減少しており、この層が充実度のコア層と考えれば、歴史学部の学生充実度は、今後も減少する可能性がある。

回答項目「普通」のスコアは歴史学科が経年で増加し、歴史文化学科は前々回調査から前回調査では減少したが、2017年度は6.7ポイントも上昇した。ただし、両学科ともに全学のスコアよりも低く、この層が「あまり充実していない」「充実していない」に転じる要素を含んでいる。逆にいえば、この層が充実度の値を押しあげることも可能であり、学部として、何かしら施策を検討していく必要がある。

では、つぎに「あまり充実していない」と「充実していない」を合算した割合を、〈非充実度〉と定義してみて、その割合を経年の推移などを確認しておきたい。

全学としては2013年度から2017年度の3回調査で、前々回8.6ポイント・前回8.2ポイント・今回8.0ポイントと経年減少しているが、8ポイント台で推移している。「あまり充実していない」は減少傾向にあるが、「充実していない」は約3.0ポイント前後を推移しているので、大きな経年変動がみられない結果である。

歴史学科の経年傾向は前々回5.4ポイント・前回9.4ポイント・今回10.7ポイントと増加傾向にあり、2013年度と2017年度は倍近い上昇している。しかも10ポイント台に到達してしまっていることは注目しなくてはならないだろう。一方、歴史文化学科は前々回8.1ポイント・前回9.1ポイント・今回5.5ポイントと、前2回の調査間では微増であったのが、2017年度では大きく減少に転じている。これは「あまり充実していない」が前回比でほぼ半減したことが大きいといえる。

同じ学部でも2017年度では、非充実度が倍近いスコア差がついている。歴史学科は充実度も低めで非充実度も二けたにのぼっているという結果がでていますが、何がこのような数値に投影されるのだろうか。報告書を丹念に読み解くほかないだろう。

最後に、これらの調査結果は平均値であるため、長期的トレンドを検討していくうえでは有効であるが、その値は絶対ではなく、あくまでも学生個々をしっかりと向き合う必要がある。しかし、学生支援の施策や学部教育を検討していくうえでは、〈学生の声〉であることには変わりはなく、これらの数字に“耳”をかたむけていく必要があろう。

〔注〕

- (1) <https://www.u-tokyo.ac.jp/ja/students/edu-data/h05.html> 参照。
- (2) 第54回全国大学生生活協同組合連合会による学生生活実態調査において（2017年10月～11月実施。対象は全国の国公立・私立30大学の学生1万21人が回答）、大学生の一日の読書ゼロ時間が53.1%と、はじめて大学生の読書時間ゼロが半数を越えたことが話題となり、日本経済新聞をはじめとする新聞紙などで報道された。
この場合の〈読書〉は、電子書籍も「読書」に含むが、勉強や趣味など、読む目的や内容がどこまで読書に入るのかは、回答者の判断に委ねられているため、一概にゼロ時間が半数を越えたかは即断できない一面をももつ。
- (3) 佛教大学学生部「学生生活」に関するアンケート委員会編『学生生活白書』平成6年版・平成9年版・平成11年版・平成6年版・平成13年版・平成15年版・平成17年版「はじめに」など参照。
- (4) 山極伸之「はじめに」『佛教大学学生生活実態調査 2013』（佛教大学学生支援課 2014年）1頁。
- (5) 『佛教大学学生生活実態調査 2017』（佛教大学学生支援課 2018年2月）、4頁。
- (6) 就職で不安な点は両学科とも、第1位は「就職できるかどうか」で、歴史学科65.7%、歴史文化学科61.7%と、全学58.1%と比較しても若干、高い（【表8】）。この項目が第1位となるのは就職への不安としては当然であろうが、前述した不安や悩みの質問においても、「進路（就職・進学等）」が歴史学科53.9%・歴史文化学科63.5%にのぼっていることと相関性ができているといえる。経年では、二学科とも2017年度に減少しているが、これも経済状況・就職環境の好転が影響しているといえよう。

表8 「進路について不安に感じることは何ですか？」

	●凡例	就職できるかどうか	やりがいを持って仕事ができるかどうか	自分の適性に合った職業を選べるかどうか	規則正しい生活ができるかどうか	社会人として様々な束縛に耐えられるかどうか	就職先で人間関係をうまく築けるかどうか	進学に関する受験に合格するかどうか	進学に関する費用（学費等）を捻出できるかどうか	大学院進学で就職する時期が遅れること	いつごろから就職活動すればよいか	とくに不安に感じたことはない	その他
全体 時系列	全体 [2013] n=2062	67.4	—	32.1	5.6	14.0	24.3	11.8	3.9	1.6	9.0	2.7	4.6
	全体 [2015] n=2288	64.8	—	34.1	5.0	9.2	20.0	10.9	3.3	1.5	7.6	3.5	3.0
	全体 [2017] n=3815	58.1	21.0	28.1	6.8	11.4	17.9	9.2	2.5	1.5	6.7	3.9	3.5
学科 時系列	歴史 [2013] n=277	73.3	33.9	3.6	16.6	24.5	11.2	4.3	1.4	6.9	2.7	2.2	2.9
	歴史 [2015] n=213	76.1	—	29.6	2.8	7.5	16.9	13.6	5.2	3.3	8.9	2.3	2.3
	歴史 [2017] n=347	65.7	16.4	32.0	5.2	11.2	17.3	6.3	2.6	2.0	5.2	5.5	3.5
学科 時系列	歴史 [2013] n=162	71.0	—	40.1	4.9	16.0	22.8	5.6	3.7	0.6	10.5	1.9	7.4
	歴史 [2015] n=143	70.6	—	46.2	7.0	11.2	20.3	6.3	2.8	0.7	4.9	2.1	2.1
	歴史 [2017] n=222	61.7	18.5	33.3	6.3	21.6	15.8	9.9	2.3	1.8	10.8	3.2	0.9

関連して、項目「いつごろから就職活動すればよいか」という不安は歴史学科5.2%、歴史文化学科10.5%で、歴史文化学科が14学科中第1位である。この項目の割合がさがれば、当然、「就職できるか不安」の割合も下がってくると考えるが、キャリア教育、あるいは3年生・3年生ゼミでの啓蒙が重要となろう。

第2位も共通しており、「自分の適性に合った職業を選べるかどうか」で、歴史学科32.0%・歴史文化学科33.3%で、こちらも経年減少しているとはいえ、第2位である。自己分析など、学部では1年生よりキャリア教育を体系的に実施しているが、この数値をみると、より工夫していく余地があるものといえる。また、歴史文化学科は先に言及した就職に対する重視面で「自分の能力が活かせること」が41.4%と、全体と比較してもスコアが高い。照合すると、自身の能力と就職先の合致を意識する傾向がつかめるであろう。このことは「やりがいを持って仕事ができるかどうか」18.5%が第3位であることとも相関性があると考えられる。

歴史学科第3位は「就職先で人間関係をうまく築けるかどうか」17.3%、歴史文化学科も15.8%をしめしており、対人関係の不安が比較的高いことをしるしている。不安や悩みを聞く質問で「友人等との対人関係」は歴史学科17.0%・歴史文化学科18.9%で、対人関係の不安は両学科とも比較的高く、このようなことが就職の際の不安にもあらわれているのではなかろうか。

- (7) 「10章 板書する」「11章 スライドを提示する」「12章 教材を使う」(佐藤浩章編『シリーズ 大学の教授法2 講義法』玉川大学出版部、2017年)、私立大学連盟 学生委員会『私立大学学生生活白書 2018』参照 (https://www.shidairen.or.jp/files/topics/449_ext_03_0.pdf)。
- (8) 北條英勝『『第15回学生生活実態調査』から読み解く現代学生像』(日本私立大学連盟『大学時報』) 11月号、2018年)。

(さいとう としひこ 歴史文化学科)

2019年11月14日受理